

「柏崎の橋」 28 なた橋（下田尻）

なた橋は「鉈橋」「柴刀橋」ともいい、三階節の歌詞に繰り返し登場する。

「春日おさ橋もろか橋、田尻、田尻の鉈橋
茨目街道のどおど橋」

「新道折橋柳橋、田尻、田尻の鉈橋
大橋かけるがなみだ橋」

『柏崎市伝説集』では、この橋を「下田尻から平井に行く道中に榎の木がある。その近くを流れる川にかけた橋」としている。また名前の由来にまつわる伝説を次のように記している。

「昔、源九郎義経公が北国下向の際、中鯖石村で一泊し、長岡方面へ行こうとしてこの地を通り過ぎようとしたが、川のため通ることができなかった。しばらく立ちながら考えていたが、一行の中に強力無双の弁慶がいたので相談をした。弁慶が近くの農家から柴刀を借りてきて、通行人が休み場になっている場所の榎を切り、柴刀で削って川にかけ渡したので、義経一行は無事通り過ぎていったというので、この名がつけられた。」

この川は鯖石川をさす。鯖石川本流の両脇を西江・東江が並行するように流れ、下田尻集落と平井集落を分断するように流れている。したがって、集落を繋ぐ橋は重要な役割を担っていた。

関甲子次郎著『柏崎文庫』に、なた橋に関する

絵図が収められている。同書によれば、その絵図は明治40年9月4日関氏が三男を伴って平井村の小菅氏を訪れ、古文書や宝物を拝見した際に書き留めたものだとする。絵図には、下田尻から平井の周辺の鯖石川とその用水、魚沼（街）道、山々などが描かれ、当時の様子がうかがえる。絵図の上部中央から点線が続いている。これは柏崎から平井間を往来するルートを示している。木の脇を通りたどると、西本江に「奈たばし」が架かっているのがわかる。「奈たばし」を渡り、「柏崎道」を進むと平井に辿り着く。

絵図の中で「奈たばし」はしっかりと橋の形をして描かれている。昭和50年頃は土橋として存在したようだが、現在その姿はない。時代の流れの中で、下田尻地区は道路整備が進み新興住宅街となった。また柏崎市立東中学校も開校し、若人の活気が満ちあふれている。しかし、「なた橋、米山を望む」と関氏が『刈羽郡案内』に記したように、刈羽山を背景に水田が広がる景色は爽快で昔ながらの村の風景が感じられる。

三階節 (916頁) 松田 政秀編
柏崎文庫 46の2 (2001年) 関甲子次郎著
『刈羽郡案内』(1927年) 柏崎ふるさと人物館編
田尻村のはなし (224頁) 酒井薫風著
刈羽郡案内 (224頁) 関甲子次郎 著

